(6)鶴見和子との出会い

戦争は丸山にとって思いがけない出会いをもたらしてもくれた。コロンビア大学大学院で学び博士論文の執筆にとりかかるはずだった鶴見和子（つるみかずこ：画像〈『鶴見和子曼荼羅』Ⅷ、藤原書店、1997 年〉）は、日米開戦にともなって帰国を余儀なくされたが、日本でも学問を継続する道を選び、先輩の紹介で丸山の研究室に出入りするようになった。丸山から論文「近世日本政治思想における「自然」と「作為」」が掲載された『国家学会雑誌』を寄贈された鶴見は、これを読みふけり、深い感銘を受けている。

鶴見はその後、丸山の自宅にも訪れるようになり、1944（昭和 19）年には丸山が「赤紙」（臨時召集令状）を受け取るところにも居合わせている。丸山にとってアメリカで教育を受けた鶴見の飾らない人柄とざっくばらんとした物言いは快いものであり、鶴見の父・鶴見祐輔（つるみゆうすけ）経由で入手したアメリカの戦後処理方針の情報を教えてくれるなど、重要な情報源ともなった。

二人の交流は戦後さらに発展した。鶴見の弟・鶴見俊輔(つるみしゅんすけ)が発起人となった「思想の科学研究会」への参加を依頼された丸山は、これを快諾した。1946（昭和 21）年 5 月に雑誌『思想の科学』が創刊されると、丸山はハロルド・ラスキ『信仰・理性及び文

明』の書評、バートランド・ラッセル『西洋哲学史』の合評などを寄稿している。日米開戦がもたらした二人の出会いが、戦後に花開いたと言えよう。